

此度数分布圖は一體何を表はして居るのだろうか。吾々は先づ二つの曲線とも大體、左寄りの傾きを持つて同様な事實を物語つて居るのを見るだらう。即ち甲店では八十五圓の段階、乙店では五十五圓の段階の賣れゆきの日が一年中で最も多く起り、それより多く賣れる日は次第に少なくなつてゆく。次に兩曲線は大體に同じ傾向は持つけれど、又、違つた點をも示して居る。即ち甲店の正常賣上高が八十五圓邊りであるのに乙店のはそれより低く五十五圓邊りである。是は役人等よりも労働者達の方が購買する額の少いことを意味するのだらう。更に、甲店の正常賣上高の日數が乙店のそれよりも稍低いことは、労働者の購買の方が（額は少いが）平均されて居ることを表はすのであらう。此事は恐らく労働者の勞銀支拂日が月に五回にも分かれて居るのに反し、役人の給料日は月一回である、といふ事情から來るのだらう。最後に曲線の山の尖りは甲店よりも乙店の方が遙かに強い事實は、労働者が支拂日に一度に金を使つてしまふ傾向を有つて居ることを物語るのであらう。斯のやうにして吾々は甲乙兩店の一年間の總賣上は殆ど等しいのに、其毎日の賣上高の動きが如何に兩者によつて異なるか、従つて其經營方針も如何に異ならざるを得ないかといふ様な事情が大數研究によつて斯くも鮮やかに示されるのを知るのである。

第二項 比率研究

吾々は既に第一章第三節で比例數のことを知つて居る。比率研究といふのは要するに此比例數によ

る經營活動の研究である。唯、注意しなければならないのは、諸種の會社の業績批評などによく比率が用ひられて居るけれども、あの場合の比率は唯の計算法としての比率、或は算術の意味での比率であつて、決して其まゝでは統計的研究でいふ所の比率研究ではないといふことである。統計的研究は算術の意味の比率を利用はする。併し、恰もひとり切り離された數字記録が其まゝでは統計とならない様に、會社批判のやうな場合の比率は、大量觀察といふ眼鏡で見られない限り統計的比率研究とはなつて來ない。が一度この眼鏡を透して見るときは、それが時間的大量觀察であれ、場所的大量觀察であれ、そこに統計的比率研究が発生する。故に此處でいふ比率研究は常に大量觀察に基づくものでなければならぬ。

第一章で述べたやうに、形式上比例數には二種類あるところから、經營統計での比率研究も亦次の二種類に分たれる。

〔1〕 對立比による研究

經營活動に關する數字を時間の順序に並べた大量の研究、即ち時系列の研究の場合には對立比は主として指數の形をとつて利用される。對立比の特殊な場合である所の指數は、斯うして經營活動の歴史的比較研究に役立つのである。併し指數の形をとらない對立比も勿論經營統計に用ひられる。それは主として時系列以外の大量の場合である。例へば此處に擧げようとする實例のやうな場合である。

アメリカのハアヴァード大學商業調査所では毎年、アメリカ大都市の百貨店の經營費統計を發表して居るが、今その一部分を對立比の實例として紹介しよう。先づ一年間の賣上高百萬弗未滿の百貨店多數に就き、其平均一店あたりの總利益（賣上高から賣上原價を引いた殘額）及び經營費を夫々、賣上高一〇〇％に對する對立比に直して見た。

〔賣上一ヶ年百萬弗未滿の百貨店〕		一九二六年	一九二七年	一九二八年
（調査店數）		（二八四）	（三二八）	（二五一）
總	利 益	二八・九	二九・七	二九・六（％）
經	營 費	二八・七	二九・五	二九・八（％）
純	益	〇・二	〇・二	△〇・二（％）

此表に現はれた所によると、年賣上百萬弗未滿の小規模な店では毎年の純益は甚だ少く、僅かに賣上高の〇・二％に過ぎず、一九二八年には〇・二％の損失をすら示して居る。之を次のやうな大規模な經營と比較すると面白い現象が見られる。

〔賣上一ヶ年百萬弗以上の百貨店〕		一九二六	一九二七	一九二八年
（調査店數）		（一八二）	（一八〇）	（一六二）
總	利 益	三二・六	三三・一	三三・二（％）
經	營 費	三〇・三	三一・四	三一・七（％）
純	益	二・三	一・七	一・五（％）

即ち賣上高がより大となれば、それに連れて經營費の割合もより大きくはなるけれども、總利益がそれ以上に大となるので、結局純益は賣上の二%内外を占めることゝなつて、つまり賣上高の大きい大經營ほど利潤率は大きくなつて來ることを示して居る。而も是とても年々減少してゆく傾向を吾々は其處に見るではないか。

〔II〕 構成比による研究

是が最も有効に用ひられるのは先に述べた資本構成比の研究の場合である。資本構成比研究といふのは、つまり、會社が發表する貸借對照表（バランスシート）を利用して、其貸方合計（或は借方合計）を一〇〇%とし、それを構成する各部分、例へば固定資産、流動資産、純資本、他人資本等の割合（構成比）を計算して、其會社の資本状態を研究することである。併し乍ら是とても唯一個のバランス・シートに就いて行ふときには統計的意味の構成比研究にならないことは前述の通り。

今こゝに我が國に於ける資本構成比研究の代表的なものとして、といつても他に實例がないからだが、名古屋高商で行つて居る研究を極めて簡単に紹介することゝしよう。それは我邦紡績業經營に關する資本構成比率の研究である。是は商業經營ではないけれども、資本構成比研究の大體を窺ふには充分であると思ふ。

調査年度大正十五年上半期、調査會社數四十七。之を資本金の小さい所から大きい所への順序でA

經營、B經營、C經營、D經營……の階級に分つ。即ち、

- A 經營——資本金五百萬圓未満のもの……………(一三社)
 - B 經營——五百萬圓以上二千萬圓未満のもの……………(二三社)
 - C 經營——二千萬圓以上のもの但しD經營を除く……………(七社)
 - D 經營——鐘紡、東洋紡、大日本紡、富士瓦斯……………(四社)
- (此他にD經營があるが茲では略す)といふ風に。

次に此各階級に就いて、平均貸借對照表を作る。それには各會社の貸借對照表の形式が違つて居ては困るので、豫め標準貸借對照表を定めておいて之を各會社に送り記入して貰ふ。之を集めて、ABCD各階級毎に平均貸借對照表を作る。更に此平均貸借對照表から、其借方（若しくは貸方）總計を一〇〇%として其構成部分を百分率で表はした所の平均比率貸借對照表を作る。其時、構成比が用ひられる譯である。斯ういふ風にして、ABCDの各階級毎に一つづゝの平均比率貸借對照表が出來上る。是が出來上れば、あとはもう、百分率で表はされた各項目をABCDと比較してゆくばかりである。例へば流動資産の割合はAが二八・〇三%、Bが三七・四九%、Cが五三・四八%、Dが五一・五〇%といふ風に。或ひは此上更に各項間の對立比（例へば流動資産と流動負債との對立比、即ち所謂流動比など）を求めて之をABCDと比較してゆくことも出来る。斯のやうにして、經營成績の状態を如實に表はすと考へられる所の色々な比率がABCD各階級に就いて出來上るだらう。其中の極

めて重要なもの十個を採つて此調査所は『資本構成比価値率』なるものを計算した。是は要するに其會社群の資本構成状態が經營遂行上好ましいものであればある程大きな値をとる所の率である。

以上簡単に骨組だけを述べたやうな方法に従つて、此研究は一體どんな目的を果さうとして居るのだらうか。いふまでもなく是は、會社の大經營化に伴つて其貸借對照表に現はれる資本構成の状态が平均的に如何いふ傾向を辿るかを突き止めようとする目的を持つて居る。換言すれば、A、B、C、Dと次第に大經營となるに連れて、夫々の平均比率貸借對照表の各項目又は項目間の比率の中、どんなものが次第に大きな値をとつて來るか、どんなものが次第に小さくなるか、どんなものが常に同じ高さを保つて居るかを判然と知り分けようとするのである。

事實、名古屋高商の此調査研究は次の様な結果を示して此目的を可成りに果しつゝあるといふことが出来る。即ち大經營化に伴つて次第に増大するものとしては流動資産、減價償却、流動比、純資本配當率（配當金を拂込資本金で割つたもの）などがあり、次第に減少するものとしては固定資産、流動負債、固定負債、借用資本對純資本比率等があることを數字的に其程度まで見つけることが出來たのである。重要な比率を綜合した所の資本構成比価値率は全經營（四十七會社全部）平均を一〇〇とする時、次の様な状態を示した。

A	經	營	二二・四一
B	經	營	三二・七三
C	經	營	一一〇・九六
D	經	營	一五二・二一

更に此調査研究は次の如き重要な結果を教へ示して居る。それは前記の手順の途中に更に此期（大正十五年上半期）損失を招いた會社を含む所のA及びB經營を夫々損失會社群と利益會社群とに分けて研究した結果であるが、損失經營を明白に特徴づけるものは流動比の著しい低下と借用資本割合の増加とであることが分つた。而も損失會社はA經營の中では比較的大經營、B經營の中では比較的小經營のものであつて、つまりA Bの中間に集中して居ることが分つた。是は恐らく經營が小より大へと發展する途中で、主として借用資本の力に依らざるを得ないやうな、従つて缺損を示さざるを得ないやうな時期或ひは段階が存することを物語るのであらう。

以上紹介した名古屋高商の資本構成比研究は、年數も未だ少く、調査會社數も五十に足らず、而も正しく記入された貸借對照表を手に入れることの困難もあり、なかなか以て完全な統計的研究とはいへないものであり、従つて其結果は我が邦紡績業の最近の状況に就いてのみ正しいといへばいへるもので到底一般的經營法則を示すとはゆかないものであるけれど、統計的資本構成比研究の好例として、或ひは廣く一般經營統計の我が國に於ける貴重な一例として此處に紹介する値打は充分あると

思ふ。

第三項 相 關 研 究

さて愈々こゝで我々は統計方法中の花形である相関関係測定法に廻り會ふ段取りとなつた。こゝで相関研究といふのは相関関係測定法による經營活動の研究である。相関関係といふのは第一章第三節の終りにも簡単に述べて置いたやうに、二つの現象があつて、其のうち一つの現象が量的に……すればする程もう一つの現象がそれに連れて……するといつたやうな関係である。例へば賣上高が増加すればするほど經營費は増加するとか、夏季に日照りの日數が多ければ多い程その年の米の收穫高は大きいとか、或ひは反對に、金利が高くなればなるほど貸出高は少くなるとか、國內物價が高くなればなるほど爲替の受取相場は安くなるとか。斯うした関係を挙げれば實に數限りない。恐らく日常のあらゆる現象は何らかの斯のやうな関係を保つて居るのにちがひない。斯うした相関関係にも二種あつて前の二例のやうに一方が増加すればする程他方が増加する場合即ち兩方とも一致した變動を見せる場合を『正の相関関係』と言ひ、後の二例のやうに一方の増加が他方の減少となる如き逆の變動を示す場合を『逆相関関係』と呼んで居る。

斯うした相関関係は其の二つの現象の量的變動を夫々ぐらふに描いて見る時、大體あるかないかの見當をつけることが出来る。即ち二つ變動を表はした曲線が互に一致した上下を示す時には正相関が、或ひは反對に一方が山になると他方が谷になるならば逆相関があると考へてよい。けれど此程度の關係なら圖示法によるまでもなく大體の見當はつくだらう。圖示法によつた所で大體のことしか分りはしない。

併し今、若しも斯の相関関係が何かの方法で正確に測れるとしたならば、若しも單に相関關係の有無ばかりでなく、有る場合には一體どの程度の強さで有るのかも正確に知ることが出来るとしたならば、どんなにか便利なことだらう。AとBとの二現象の間に一定の程度の相関關係が有ると知り得た時は、吾々はAからBを推し測り、又はBからAを窺ひ知ることが出来るだらう、其一定の程度の確實さを以て。或は又、今まで知られなかつた二現象間に相関關係ありといふことになればそのことから推して其二現象間には一定の因果關係があるのだらうと考へることさへ出来るかも知れない。何とかして之を正確に數字的に測定する手段はないものか。

斯のやうにして案出されたのが相関關係測定法である。是にも色々種類があるけれど、其うち最も精密な(勿論比較的話であるが)最も多く用ひられて居るのは、カアル・ピアソンによつて考案された方法である。以下簡単に之を述べて見よう。

ピアソンの相関關係測定法は要するに相関關係の程度を一つの數を以て精確に表はさうとするのである。其數をピアソンの相関係數と呼んで居る。普通、相関係數と呼ばれて居るのは即ち是である。

此係数は $+1$ と -1 との間にある値をとつて、決して其外へ出ることはない。此係数が $+1$ である時は正の相関關係が完全に存することを意味し、 -1 である時は逆相関の完全なることを表はして居る。そして係数が $+1$ と -1 の恰度中間である 0 だとすれば、そこには正にも逆にも相関關係はなく、其二つの現象は互に全く無關係であると考へることが出来る。併し實際は相関係数が $+1$ や -1 や 0 になることは殆どなく、其等の間の、例へば 0.56 とか 0.84 とかの値を取るのが普通である、相関係数が $+1$ から 0.5 まで、或ひは -1 から 0.5 までの間の値をとる時は大體、強い相関關係を表はすものと考へられ、 0.5 から 0 まで又は 0.5 から 0 までの間にある時は大體、弱い相関關係があるものと考へてよいだらう。(實はもつと複雑な標準があるのだが常識書として茲にはそれを省略しよう)

斯の相関係数は然らば如何にして計算されるのか。それには實は複雑な數學の知識と専門的な統計學の技術とを必要とするのであるけれど、此處では唯、その計算法の筋書だけを實例によつて簡単に説明することゝしよう。

工業經營の問題ではあるが、今、或る工場での就業度と製造費とが次表のやうな數字を示したとする。(就業度は或る一定の方法で計算された標準を 100 として居る)

就業度	製造費
100	70,000.—
95	70,000.—
110	72,000.—
105	71,000.—
95	70,000.—
85	69,000.—
80	67,000.—
90	68,000.—
100	69,000.—
110	71,000.—
115	72,000.—
105	71,000.—

相関關係測定もやはり統計方法の一種である以上、こんな僅かな數列に對して相関係數を求めようとするのは實際は正しくないのであるが、例を簡單にするために之を用ひるのである。此二つの對應する數列に對して相関係數を求めるには次頁の表のやうな手続きを踏むのである。

即ち先づ②と③とで就業度及び製造費の平均を求め。④と⑤とでは今求めた平均から各月の値がどれだけ隔つて居るかを計算する。此場合平均より大きいものは $+$ 、小さいものは $-$ を附する。次に④の各項と⑤の對應項とを乗じ合ふのが⑥である。⑦では④の各項の平方を、⑧では⑤の平方を求め。⑦と⑧とは $-$ の附く項はあり得ない。斯うして求めた⑥⑦⑧の合計を表の下の公式に代入すれば相関係數が求められる譯である。今の例では係數が $+0.90$ であるから、其の工場の就業度と製造費との間には極めて強い、殆ど完全に近い程の正相関がある譯になる。即ち工場の就業の程

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
月	就業度	製造費 (單位千圓)	平均偏 差の差	平均偏 差の差	④と ⑤積	④の 平方	⑤の 平方
一月	100	70	+ 0.75	0	0	0.5925	0
二月	95	70	- 4.25	0	0	18.0625	0
三月	110	72	+10.75	+2	+ 21.50	115.5625	4
四月	105	71	+ 5.75	+1	+ 5.75	33.0625	1
五月	95	70	- 4.25	0	0	18.0625	0
六月	85	69	-14.25	-1	+ 14.25	203.0625	1
七月	80	67	-19.25	-3	+ 57.75	370.5625	9
八月	90	68	- 9.25	-2	+ 18.50	85.5625	4
九月	100	69	+ 0.75	-1	- 0.75	0.5625	1
十月	110	71	+10.75	+1	+ 10.75	115.5625	1
十一月	115	72	+15.75	+2	+ 31.50	248.0625	4
十二月	105	71	+ 5.75	+1	+ 5.75	33.0625	1
合計	1190	840			+165.00	1241.75	26
平均	99.25	70					

$$\begin{aligned} \text{相関係数} &= \frac{\text{⑥の合計}}{\sqrt{\text{⑦の合計}} \sqrt{\text{⑧の合計}}} = \frac{165}{\sqrt{1241.75} \sqrt{26}} \\ &= \frac{165}{180.08} = +0.901626 \end{aligned}$$

度が高い月には商品の製造に要する製造費（是は間接費や販賣費などに對立する所の原價計算上の一種の費用である）もそれに伴つて多額に上ることを示して居る。

この方法による時は一應どんな二つの現象でも、それが數量的に測り得る限り、其間の相關係を測ることが出来る。吾々は屹度、中央銀行の紙幣發行高と物價との間に可成強い正相關係があることを見出すだらうし、又、商品の供給量と價格との間には極めて強い逆相關係のあるのを發見するだらう。併し、そのためには充分多くの數列を基礎にして相關係数を求めなければならぬ。ところが、斯のやうな煩雜な手數の後に得た相關係數も、實は、其の二つの現象間に因果關係があるといふ結論を與へることが出来ないのである。相關係數は成る程、相關係を示しはするけれど、決して因果關係を表しては居ない。例へばAとBとの間に強い相關係があつたとする、それはAが變ればBが従つて變るといふことにもなるし、Bが變るとそれに隨つてAが變るとも解釋出来る。それが即ち相關係なるのである。故に、Aが變ればそれに續いてBが變ると一方的に定まつて居る所の因果關係とはちがふのである。相關係では何方が何方の原因だか判斷することは出来ない。之を判斷するには統計方法を離れて、『理論』の力による他はない。相關係測定法は何時でも『理論』の後から隨つてゆくばかりである。だからといつても、それが統計方法中の花形であり、吾々が欣んでそれを迎へることに何等の變りもない。何となれば、相關係測定法は『理論』による因果關係判定に有力な暗示を與へ

るばかりでなく、一度『理論』の力で其現象間に因果関係ありと確かめられた曉に於て、その関係がどの位の強さを有して居るかを判定するのは全く此の相関係数の獨自な繩張りだからである。

相関係数算法に關しては、種々複雑な注意や規則や制限があるけれど、それらは總べて讀者のより深い研究に委ねることにして、此章を終らう。

第五章 景氣豫測

第一節 景氣豫測とは何か

世に成金といふ言葉がある。興隆する經濟界の風雲に乗じて一攫千金の夢を一朝にして實現し、其富貴を誇るかと見るまに、其多くは一夜の嵐に忽ち没落の悲哀を味はふ。實に此成金といふ言葉ほど世の景氣の轉變を切實に思ひ起させるものはない。

景氣は循環するものだとはいふ可成りの昔から、色々な形、色々な仕方であらう。或ものは財界好轉の兆見ゆと唱へ、或ものは好景氣永遠に來らずと叫んで、經濟學界は今や鼎の涌く様な騒ぎである。併し此點に就いて實際どうなるかを茲で論じようとするのではない。

景氣とはつまり世の中一般の經濟活動の状態のことである。此活動状態は時に極めて活潑であり、

時に著しく振はないことがある。即ち一般の金廻りがよくなり、生産が盛んとなり、新しい企業が増設され、物價はとんとん拍子に上つて行くと言ふ様に一般の經濟活動が活潑な、好景氣の時があり、之と反對な有様を見せるところの不景氣時代がある。つまり景氣が循環し變動するのである。通常此循環は次のやうな順序をとるといはれて居る。

不況期——上昇期——好況期——下降期——不況期

そして不況期から不況期までの一廻轉に要する年月が或ひは十年、或ひは七年、或ひは四十ヶ月等々ともいはれて居る。

しかし、その正否は兎も角として、何故景氣は循環するのだろうか。景氣變動の原因は何處にあるのだろうか。此問題を解決するためにこそ従來色々の景氣變動論がさまざまに唱へられて來たわけなのである。即ち是迄の景氣論は殆ど常に此景氣循環の原因をのみ追求して來た。色々な、實に數多の學説は、このため其處に現はれた。或は之を人間の心理作用によつて説かうとし、或は制度の變遷を以て、或は生産と消費との適應關係を以て之を説明しようとし、或は現在の社會制度、經濟組織からは當然に出て來るものだと叫ぶ。まことに紅紫とりどりの相である。甚しいのになつては景氣循環を太陽の黒點の所爲せいにしたり、金星の運行を持ち出したりする説まで現はれた。

斯うした種々の努力にも拘はらず、景氣循環の原因は一向、はつきりと把めさうもない。そこで新

しい努力が次のやうな企てに向けられて來たのである。即ち、抽象的な理論の力で其原因がはつきりと把めないとしたならば、原因論はそれとして置いて、別に、實際の景氣の動きが如何なつて居るかといふ方面を眺めてゆかうと言ふ企てである。是は一方に於て經濟學が數字的に實證的に研究されねばならないといふ風潮と一しよになつて、非常に強い力を獲、従來の景氣變動原因論と際立つて對立するやうになつたのである。此景氣變動の、謂はゞ、現象論は實際の景氣の動きを數字的に眺めてゆかうとするのであるから、其處に當然、統計學が利用されて來なければならぬ譯になる。斯のやうにして景氣變動の統計的研究が起つて來たのである。

斯の景氣變動の統計的研究は一つの重要な實際的な目的を持つて居る。此目的こそは本章の主題とするところの景氣豫測である。實際の景氣の動きを統計的に眺めてゆくことは、換言すれば、過去の景氣の状態を數字的に大量的に眺めてゆくことである。しかし、それだけでは終らない。過去の景氣を統計的に觀察する時は其處に何らか一定の秩序が見出されるにちがひない。斯のやうな過去の秩序を是から先の景氣にまで押し進めて當て嵌めることは出來ないだらうか。過去の觀察によつて將來を推測することは出來ないだらうか。今日と明日とで經濟社會を支配する諸々の條件が一變して了はない限り、是は全然出來ない相談ではないであらう。景氣豫測とは實に斯うした努力の謂ひである。

勿論、今後十年先の景氣が豫測されるわけではない。恐らく一年先も暗であらう。半年の歲月の中

には經濟社會を支配する條件にどんな變化が起るか分るものではない。誰が大正十二年の八月中に
の大震災を豫想したらう。吾々人間にとつては一秒先も暗である。併し斯うした不慮の出來事がない
ものとして、大體從來と同じ條件の下にある一、二ヶ月の將來には景氣は一體どうなるか。之を見よ
うとするが茲で謂ふ所の景氣豫測である。

景氣豫測は過去の景氣の動きの統計的觀察を基礎として行はれる。けれど過去の景氣を統計的に見
ると言つても、「是が景氣です」と言ふやうな器用に纏まつた數字があるわけではない。景氣はあらゆる
經濟活動の要素の複雑な集りであるから、景氣を統計的に觀察しようとするには其要素とも見らる
べき諸々の經濟活動の結果を一々眺めて、それを何らかの方法で纏め上げなければならぬのであ
る。従つて、景氣變動の統計的研究の中心問題は、一體どんな要素を觀察すればよいか、其の多くの
要素をどんな方法で綜合したらよいか、更に其の綜合したものから如何にして將來の豫測をなしたら
よいかといふ點にある。

此際、觀察せらるべき要素は過去から現在にかけて並んだ一聯の數字である。時の順序に並んだ數
字の列、即ち時系列である。だから景氣變動の統計的研究、従つて景氣豫測の際に必要なのは時系列
に關する統計方法である。先づ思ひ浮ぶのは指數であらう。實際、指數 依らなければ景氣變動の統
計的研究は恐らく出來ないであらう。此研究は要する所、一個或は數個の指數によつて景氣を表はさ

うとするのにある。景氣豫測はつまり景氣指數バロメーターによる豫測なのである。此景氣指數を求めるために一
體どんな時系列が其の要素として選ばれたらよいか、そして選んだ時系列から景氣指數を造り出す
ために一體どんな時系列解析法が用ひられたらよいか。是は景氣豫測を試みる夫々の人により夫々
の處によつて異なつて來るだらう。

第二節 景氣豫測の實際

然らば實際に景氣豫測は如何な工合に行はれて居るか。次に各國の狀勢を眺めて見よう。

景氣變動の統計的研究が眞先に起り、現在尙最も盛に行はれて居るのは流石にアメリカ合衆國であ
る。實踐的精神の濃厚な弗の國アメリカに大規模な景氣豫測の企てが起きるのは當然といつてもよい
だらう。現在のアメリカには次のやうな種々の企てがある。

- ハアヴァード景氣指數
- バブソン景氣指數
- ブルツクマイヤー景氣指數
- ハミルトン景氣指數
- スタンダード景氣指數
- ノースウエスタン大學景氣指數 等。

此中、ハアヴァードのバロメーターは統計學の上から見て最も合理的——勿論比較的の意味ではあるが——なものとして科學的景氣豫測の標本とされて居り、バブソンのバロメーターは此種の企ての草分けとして有名である。

米國に先鞭をつけられた各國は次々に之に倣つて夫々の景氣豫測の機關を設け、夫々のバロメーターを發表するに至つたが、中でもハアヴァードの追隨者が一番多い。列國に於ける代表的なものを擧げるならば、

(獨逸) 伯林景氣研究所ではワグマンを指導者としてハアヴァードの方法を骨子とし幾分の修正を加へて經濟バロメーターを發表して居る。其の他中央統計局、フランクフルト新聞等からも指數を發表して居る。

(英國) バウレイ教授を主催とするロンドン・ケムブリッジ經濟研究部がある。

(佛國) 中央統計協會及びパリー大學などがある。

此他、スエーデン、ベルギー、ソヴェット聯邦等にも景氣豫測の機關が設置されて居る。

我が國では現在、大阪の野村證券や三菱合資の資料課あたりで、やはりハアヴァードを模した景氣研究が行はれて居る。其他、ダイヤモンド社、東洋經濟新報社等の經濟雜誌社、或は極く最近の所では時事新報社などでも景氣豫測を試みて居る。

以上、數多の景氣豫測の企ての中、最も科學的なのは先にも述べた様に、ハアヴァードの指數である。バブソンのバロメーターも有名ではあるが、其指數作成法が非常に亂暴であつたり、其の豫測の標準が物理學上の原理(運動と反運動とは相等しい)であつたりして、科學的な豫測法とは一寸いひ難いものである。だから此處ではハアヴァードの景氣豫測法に就いて稍々詳細に説明して見よう。是は又ハアヴァードを模した各國のそれを理解する助けともなるだらう。

ハアヴァード大學の經濟調査委員會のビジネス・バロメーター、略してハアヴァード景氣指數は同大學教授ワレン・パーソンズによつて考案された所の方法に従つて作られる。その方法には高等數學的な要素が多分に織り込まれて居て可成り複雑なものであるが、此處では數學的部分を全部除いて唯其原理なり骨子なりだけを極めて大ざつばにスケッチすることにしよう。但し、此パーソンズ法による時系列の解析は唯に景氣豫測のためのみならず、一般に時系列の統計的研究を行ふ際、頻繁に且つ有効に用ひられる解析法であるからして、此處では其の方法の内容は説明しないまでも茲に斯ういふ解析法があるといふことだけは其折々に注意してゆくことにしよう。

パーソンズの方法を述べる前に其底に横たはつて居る所の根本假定を知つて置かなければならぬ。それは即ち、すべて時系列によつて表はされる現象は、時間の経過に従つて色々と變つた値を取るものであるが、其變化を時系列數字に與へるのは次の四つの原因であるといふことである。即ち次の四原因の各々が或は強く或は弱く働いて其の結果時系列の數字に種々な波動を與へると言ふのであ

る。即ち

(1) 趨勢的變動——普通トレンドと稱されて居るもので、人口の遞増や生活様式の向上などによつて齎らされるやうな、一定の秩序を以て、時の進行に伴うて、次第に遞増したり遞減したりする變化を與へる力である。

(2) 季節的變動——春夏秋冬のやうに一年のうちの月により姿節に伴うて起る變化であつて、それ故に毎月の値は異つて来るが、一年毎に規則的に繰り返す所のものである。故に季節的變動ばかりを考へる時は毎年同月は等しい値を示すことになる。

(3) 循環的變動——ほど一定の期間内に、規則正しい波状を描いて繰返す所の變化であつて、パーソンによれば是こそ眞の、純粹の景氣循環による變動である。

(4) 不規則變動——前記三變動の外に、突發的な或は其の事象に特有な偶發的な勢力によつて統計數値に變化を及ぼすもの。地震とか洪水とか旱魃とかのやうな自然現象、戰爭とか同盟罷業とかのやうな人為現象は突發的な不規則變動の例であり、新發明による製造法の革命や、取引先の蹉跌や、流行の變遷などは其事象に特有な偶發的な不規則變動の例である。

すべての時系列數字は此の四原因を含んで居る。此四者が夫々變つた強さの組合せで結びついて一つの時系列の各時點の數字の大いさを決定して居る。更に言ひ換へれば、一本の時系列(例へば一八

五〇年から一九三〇年までの物價指數の變動)は此等四つの變動の組合はさつたものである。だからパーソンズに従へば一本の時系列數字は一定の解析方法によつて此等四つの變動系列に分解することが出来るわけである。パーソンズは其分解方法を説明して居る。

以上の様な根本假定を頭に置いて、次に吾々はパーソンズの景氣豫測法の第一段に入らう。それは先づどんな統計材料を選んで彼の景氣指數の要素とするかの問題である。

始め彼は五十種の統計材料を選んだ。けれど是に就いて深い研究を行つた末、之を二十四種に減じ更に一九一九年に發表した所では之を次の十二種に減じて居る。

- | | | |
|-------------|---------------|-----------------|
| A | B | C |
| 十鐵道會社社債の利廻率 | 銑鐵生産高 | 同 |
| 二十鐵道會社の株式相場 | 紐育市以外手形交換高 | 紐育市手形交換所組合銀行貸出高 |
| 一定數の工業株式相場 | ブラッドストリート卸賣物價 | 預金高 |
| 紐育市手形交換高 | 勞働局卸賣物價 | |

四乃至六ヶ月商業手形割引率
六十日乃至九十日手形割引率

ところが現在では是が更に又次の五種に減じて居る。

- A 工業株式相場
- 紐育市手形交換高
- B 紐育市市外手形交換高
- 十商品物價指數
- C 六十日乃至九十日手形割引率

此處にAといふのは投機に關するもの、Bは商況に關するもの、Cは金融に關するものなるを表はして居る。同じ手形交換高であるのに紐育市のは投機的な色彩を多分に持つて居るのでAに含まれ、紐育市外のそれは通常のやうに商業取引高を表はすものとしてBに含まれて居るなど可成り面白いことではないか。

パーソンズに従へば、是らの十二種なり五種なりの材料が夫々、先の四つの變動に分解され得るといふのである。そして景氣豫測の目的のためには他の變動を棄て、唯循環的變動のみを採用しようとするのである。各々の材料に就いて求められた循環的變動は次に或方法（標準偏差）によつて單位を揃へられ、更にAに屬するものはAだけで、BはBだけでといふ工合に綜合されて、結局、A線、B

線、C線の三線が圖表の上に描かれることになる。

吾々は此處で暫らく立ち戻つて、各々の統計材料から如何にして循環的變動を求めるのか、其の方法を説明して見よう。それには先づ季節的變動と趨勢的變動とを求めて、之を原數列から取除かなければならない。

(イ) 季節的變動の求め方

季節的變動は前述のやうに、それだけを取り出して見れば、毎年と同じ月はいつても同じ値を示す様な一年毎に繰返す變動である。だから是は統計材料が年別數字である時には求めることは出来ないし、又求める必要もない。併しパーソンズが選んだ統計材料はすべて月別數字であるから之を求めなければならぬ。パーソンズは季節的變動を求めるために所謂リンク・リラティヴ・メソッド（連鎖相對法）を案出した。是は大體對前月比を數年に互つて平均する方法であるが、詳しくは數學の知識を要するから説明しない。唯、一般に季節的變動を求める場合パーソンズ法によるとある時は即ち此リンク・リラティヴ法によつたものであることだけを附加へて置かう。此方法によつて求められた季節的變動は指數の形で現はれる。之を季節指數と呼ぶ。

(ロ) 趨勢的變動の求め方

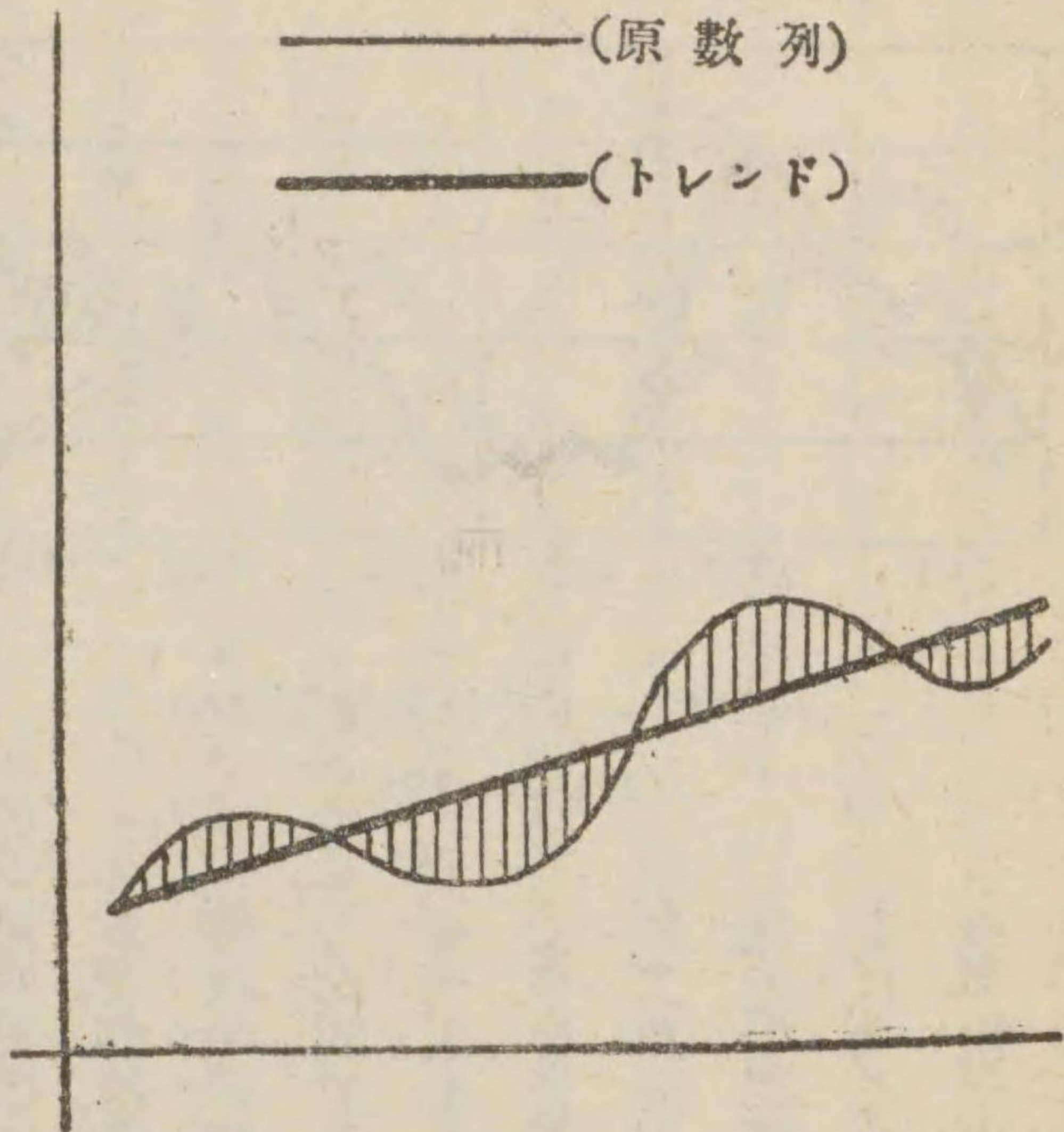
籠から逃げ出した鰻はのりくりりとうねくつて或る方向へ進んでゆく。其の足跡(?)は色々曲

つては居るけれど、結局或方向へ進んでゆくだらう。時系列をぐらふに書くとき正にそれは鰻のやうに曲りくねる。それにも拘らず鰻が進んでゆく方向が即ちトレンドに當る。一般にトレンドは波を畫く曲線の波の間を縫うて平均的に走る平らな線のことである。此トレンドは直線の場合も平らな曲線の場合もある。通常、時系列のトレンドを求めるには手描法、移動平均法、數學的嵌線法などがある。手描法とは目分量で波を縫うて平均線を描く方法であつて、易い代りに精確でない。移動平均法とは例へば五項づゝの平均を一つづゝずらして求めてゆき其平均値を貫ねる方法である。けれど之は其兩端の材料が利用出来なくなる弊がある。

パーソンズが茲に採用したのは第三の數學的嵌線法である。是は名の示す通り數學的であつて通常最も精密なトレンドの求め方になつて居る。最小自乗法を利用して數學的に、波間を縫ふ平均線を決する方法である。先達て議會で問題になつた米價の趨勢も實は此方法によるものである。最小自乗法によるといふ意味は、引いたトレンドと元の曲線との距離の自乗總和が最小になるやうにトレンド線を決定することである。(次圖参照)

パーソンズは此法に従つて、而も常に直線のトレンドを選んだ。といふのは最小自乗法による時には同じ材料から直線のトレンドも、二次曲線その他種々の曲線のトレンドも隨意に求められるものだからである。

——(原数列)
——(トレンド)



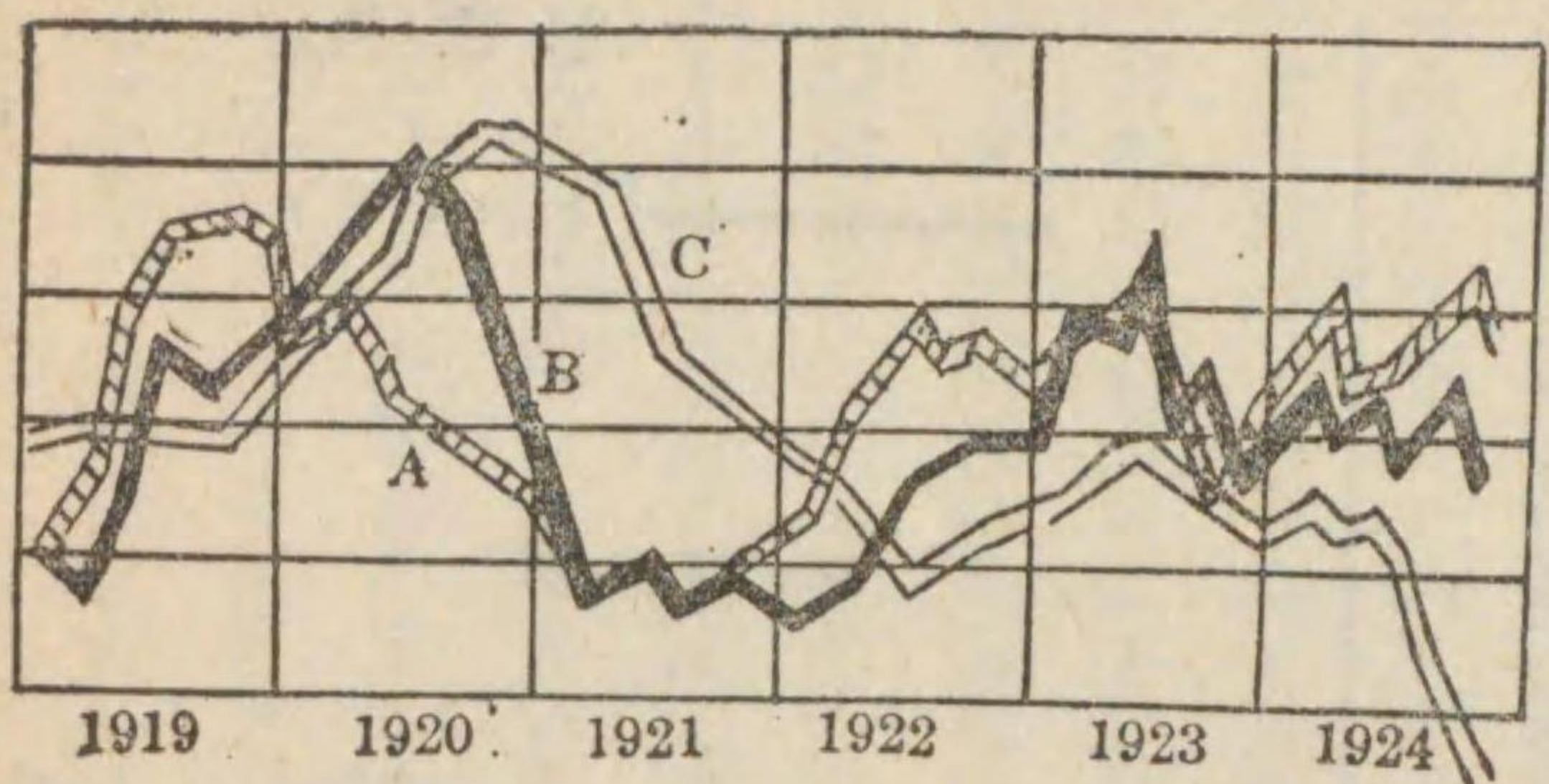
斯のやうにしてトレンド線が求められれば次にそれによつて毎月の趨勢値を求める。是で循環的變動を求めるための前準備が終つたのである。

さて、その材料の循環的變動を取り出すために、以上の如くにして求めた季節指數を毎月の趨勢値に乗じて、其積を原数列から引き去るのである。パーソンズは、更に其残りの數列を夫々對應する月の趨勢値で割つて始めて完全な循環的變動を求めることが出来るとして居る。即ち斯うして獲た所の循環的變動は趨勢的變動と

か季節的變動から完全に洗ひ清められて居て、其統計材料(例へば手形割引率を考へるが)の景氣循環を表はして居るといふのである。けれど、パーソンズの方法によつては不規則的變動を未だ除去することが出来ないのは残念至極である。

兎も角、斯のやうに各材料に就いて求められた循環的變動は前にも述べた様にA、B、Cの三者に

綜合される。綜合されたものは夫々指數の形で表はされて居る。所謂ハアヴァードの景氣指數は即ち此ABC三つの指數を稱するのであつて、是等を圖表に表はすとき、夫々投機線、商況線、金融線となる。ハアヴァードの景氣豫測は此三線を基礎にして行はれるのである。



ハアヴァード委員會豫測圖表
(1919—1924)

然らばパーソンズは如何にして此三線から景氣豫測を行ふか。簡單にいへば此三線の前後關係によつて之を行ふのである。彼はABC三線を一枚の圖表の中に重ねて書き入れて、所謂豫測圖表を作る。それは次圖の様な體裁を持つて居る。此圖でも分る通り、A線はB線より、B線はC線よりも幾分づゝ先んじて上下して居る。パーソンズは相關關係の方法（第四章参照）によつて此間の隔りが、AとB及びBとC共に二乃至四ヶ月であることを發見した。即ち例へばA線とB線との間隔を色々にずらせて各々其間の相關係數を求めらば、そのうちで最も強い正の相關を示す間隔はとりも直さずB線がA線と同じ様な變化を示して之に伴ふ際の距離である。斯のやうに相關係數によつて一方が他方に遅れる間隔を

調べる方法をラッグ（時の遅れ）の方法と呼んで居る。パーレンズは此ラッグの方法によつて、是等の間隔が共に二乃至四ヶ月であることを見出したのである。即ちB線はA線より二乃至四ヶ月遅れて上下し、C線は更にB線より同じ距離を隔て、上下する。

此事が分ればもう景氣豫測は譯なく出来るだらう。普通、世間で景氣と考へられて居るのは三線の中でも特にB線（商況線）であるが、是はA線（投機線）と同様な變化を二乃至四ヶ月遅れて示すといふのであるから、現在のA線の状態は即ち二乃至四ヶ月後のB線（所謂景氣）の状態を豫測せしめることとなる。故に、今、滑らかな傾斜に沿つて發展しつゝあつたA線が急激に低下し始め、而もC線（金融線）は尙其増加を續けて居るとするならば、吾々は二乃至四ヶ月後の近き將來に商況線の降下即ち不況期への奔落が襲ふだらうと豫測することが出来るだらう。

以上は極めて荒筋だけのハアヴァード景氣豫測法である。これによつて充分の精確さを期待することは出来ないとしても、さうした豫測が可能であるといふことは企業家その他の人々にとつて抑どれほどの利益を齎らして居るだらうか。

第三節 景氣豫測法の批評と本書の結論

景氣變動の原因論を離れた其統計的研究は、以上述べた様に華々しく發展して遂に景氣豫測にまで

進むことが出来た。殊にハアヴァード大學の景氣指數に至つては、誠に、從來知られて來た一切の統計方法を採集し利用して打ち建てられた所の、一つの統計學上の摩天閣とさへ見ることが出来るものである。

統計學は是等の企てによつて極度に發展させられた。今や世界の經濟學界は盡く統計學の洗禮を受けて居る。統計方法による實證的研究はかの抽象理論のみによる經濟學研究を恰も放逐し去つたかの觀を見せて居る。

併し乍ら吾々は統計學の讚美のあまり、その過信に陥つてはならない。統計學が守るべき節度を忘れてはならない。吾々が最も勝れたる科學的方法として讚へて居るハアヴァードの景氣豫測法ですら、其うちに忘れてはならない所の種々の缺點や制限を持つて居る。それが精密に作り上げられた組織であるために、却つてそれは様々の危険に曝されて居る。ハアヴァードの指數作製法に用ひられる多くの高等數學的技術の中にも勿論重大なる困難がひそんで居るのであるが、本書では其の數學的部分を説明しなかつたから、それは茲では述べても仕方がない。吾々が眺めて來た限りでも、例へば原數列から季節指數と趨勢値の相乗積を引くあたりには深い注意と疑問とを差向けなくてはならないと思ふ。第一、あらゆる時系列には四つの原因が影響するといふパーソンス法の根本假定は何といつても假定に過ぎないのである。

更に又、ハアヴァードの豫測法を離れて、景氣豫測法一般に眼を向けるならば、そこにも吾々は、個々の技術的缺陷とは別に、もつと根本的な大きい暗礁を見出さざるを得ないのである。即ち景氣變動の統計的研究は元來が形式的に唯其實際の經過の状態を數字によつて把へてゆく所の一つの機械的な企てなのであつた。それは抽象的な理論に對する補助手段として試みられた企てであつた。従つて斯のやうな統計的研究は常に理論的研究と相並んで相互に助け合はねばならぬものである。もしも此事を忘れ果て、統計學の過信におちいつたとするならば、そこに恐ろしい機械論の暗礁が待つて居る。冷い機械地獄がわれらを呑み込む。最近のハアヴァード・バロメーターが次第に狂ひ出して其豫測する力を失つて來たといふ事實も、確かに其重要な一因を斯うした事情のうちには有つて居る。

吾々は先に第一章で、統計學の根本的な悩みを知つた。統計學は其獨特な方法によつて、此人間の世界から神佛の世界を望み見ようとした。その努力にも拘はらず、統計學は遂に人間界のもので止まらねばならなかつたのである。私は此事を今再び此處に繰り返して、本章のみならず本書全體の結び言葉としたいと思ふ。

商業統計の常識 終

昭和六年十月十五日印刷
昭和六年十月三十日發行

「商業統計の常識」奥附
定價一圓



著者 藤本幸太郎

發行者 千倉豐
東京市京橋區南傳馬町三ノ五

印刷者 山縣精一
東京市神田區今川小路一ノ一

發行所

東京・京橋
第一相互館

千倉書房

電話(五六)三三三
京橋(五六一)五八八
振替東京九七八六一

山縣製本印刷株式會社印刷

(1) 録目書圖書倉千

白柳秀湖著	東京學藝課編 日日學藝課編	清澤 洌著	河合榮治郎著	井上準之助著	平林初之輔著	高橋龜吉著	報知新聞部編 調査部編	小島精一著	小泉信三著	美濃部達吉著	高橋龜吉著	那須 皓著	勝 正憲著	高田保馬著
日本經濟革命史(五版)	常識百話(五版)	轉換期の日本(五版)	英國労働黨のイデオロギイ	國民經濟の立直と金解禁(二百版)	文學理論の諸問題	實用經濟學(五版)	談話室(四版)	日本金融資本論(再版)	マルクシズムとボルシエギズム(再版)	行政裁判法	資本主義頽廢の諸相	日本農業論(再版)	税の話(十三版)	價格と獨占
價一・八〇 送料一・〇〇	價一・五〇 送料一・〇〇	價一・八〇 送料一・〇〇	價一・五〇 送料一・〇〇	價一・三〇 送料一・〇〇	價一・八〇 送料一・〇〇	價一・八〇 送料一・〇〇	價一・五〇 送料一・〇〇	價二・五〇 送料一・〇〇	價二・三〇 送料一・〇〇	價二・八〇 送料一・〇〇	價二・二〇 送料一・〇〇	價二・五〇 送料一・〇〇	價一・五〇 送料一・〇〇	價二・三〇 送料一・〇〇
大崎厚夫著	白柳秀湖著	山川 均著	中川 靜著	永井 亨著	平林初之輔著	報知新聞調査部編	高橋龜吉著	白柳秀湖著	松永安左衛門著	上野陽一著	向井鹿松著	小島精一著	水上鐵治郎著	小島昌太郎著
世界を動かす十二傑(五版)	親分子分(俠客編)(七版)	社會主義の話(六版)	廣告論	社會の話(五版)	近世社會思想講話	談話室漫談篇(五版)	『經濟國難來』(五版)	親分子分(英雄編)(十版)	産業改造の途(五十版)	産業能率論(十二版)	經營經濟學總論(十二版)	産業合理化(十五版)	英國の勞働組合	海運經濟要論
價一・五〇 送料一・〇〇	價一・五〇 送料一・〇〇	價一・五〇 送料一・〇〇	價一・五〇 送料一・〇〇	價一・五〇 送料一・〇〇	價一・八〇 送料一・〇〇	價一・五〇 送料一・〇〇	價一・五〇 送料一・〇〇	價一・五〇 送料一・〇〇	價一・八〇 送料一・〇〇	價一・五〇 送料一・〇〇	價一・五〇 送料一・〇〇	價一・五〇 送料一・〇〇	價一・五〇 送料一・〇〇	價二・五〇 送料一・〇〇

◆ 座講識常業商 ◆

商業學の常識	會計學の常識	商業簿記の常識	銀行簿記の常識	工業會計の常識	商業算術の常識	商業統計の常識	販賣の常識	商品學の常識
東京商大教授・法學博士 内池 廉吉著	東京商大教授 吉田 良三著	中央大學教授 黒澤 清著	東京商大教授 太田 哲三著	東京商大専門部教授 村 瀨 玄著	早稻田大學教授・商學博士 小林 行 昌著	東京商大教授・商學博士 藤本 幸太郎著	明治大學教授 井關 十二郎著	東京商大助教授 佐藤 弘著
價一・〇〇 送料十錢	價一・〇〇 送料十錢	價一・〇〇 送料十錢	價一・〇〇 送料十錢	價一・〇〇 送料十錢	價一・〇〇 送料十錢	價一・〇〇 送料十錢	價一・〇〇 送料十錢	價一・〇〇 送料十錢
東京第一 京相 橋館	千倉書房	振替 東京 八七九						

(2) 録目書圖房書倉千

著者	書名	定價	著者	書名	定價
勝正憲著	所得税の話(十版)	價一・六〇	長野朗著	支那の真相(五版)	價一・五〇
新聞經濟部編	能率増進時代(五版)	價一・五〇	武野藤介著	文士の側面裏面(五版)	價一・五〇
福田敬太郎著	市場論(九版)	價一・五〇	上野陽一著	能率祕話(十二版)	價一・五〇
政經研究會編	各政黨の主張(三十版)	價一・三〇	中外經濟部編	經濟國難打開途(五版)	價一・五〇
土田杏村著	文明は何處へ行く(五版)	價一・五〇	細田民樹著	黒の死刑女囚(五版)	價一・五〇
増地庸治郎著	企業形態論(八版)	價一・五〇	藤井悌著	英國労働黨の組織・沿革・政策	價一・五〇
小島精一著	世界經濟と合理化運動(五版)	價一・五〇	藤本幸太郎著	海上保險論(七版)	價一・五〇
白柳秀湖著	親分子分(浪人編)(七版)	價一・五〇	上野陽一著	家庭經濟の祕訣(十版)	價一・九〇
小林行昌著	賣買論(九版)	價一・五〇	勝正憲著	企業と租税(七版)	價一・五〇
石濱知行著	資本主義發達史(四版)	價一・七〇	新聞經濟部編	經濟相談(十版)	價一・五〇
小林行昌著	關稅と物價	價二・五〇	堀眞琴著	國家論	價一・三〇
末弘嚴太郎共野間海造編	農林法規集	價五・〇〇	堀光龜著	海運(八版)	價一・五〇
小島精一著	企業統制論(七版)	價一・五〇	增井幸雄著	陸運(七版)	價一・五〇
神長倉眞民著	財界巡禮記(五版)	價一・五〇	山川均著	勞働組合の話(四版)	價一・五〇
新聞調查部編	ナンセンス・ジャパン(五版)	價一・五〇	世界經濟研究所編	世界經濟(總觀)(七版)	價一・五〇

(3) 録目書圖房書倉千

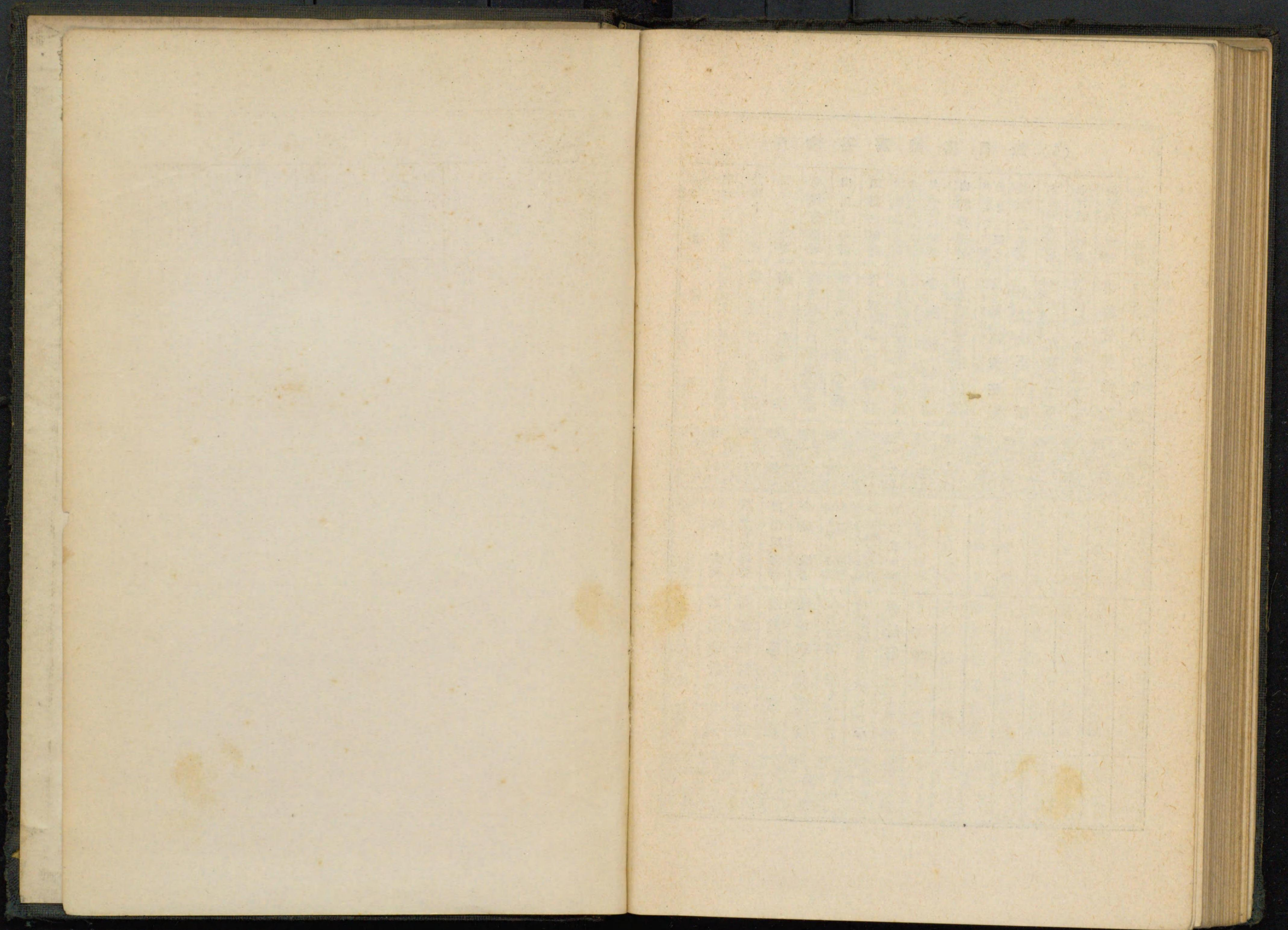
著者	書名	定價	著者	書名	定價
前田美稻著	豫算の知識(三版)	價一・五〇	林恒彦著	生活指導	價一・五〇
佐藤弘著	世界經濟地理(八版)	價一・五〇	帝國大學新聞編輯部編	大學の運命と使命	價一・五〇
米野豐實著	サウエート經濟の實體	價一・五〇	清澤洸著	アメリカを裸體にす(十三版)	價一・五〇
中村第三著	販賣革命(六版)	價一・二〇	三邊金藏著	會計監査(八版)	價一・五〇
高木友三郎著	日本經濟の實體(四版)	價一・〇〇	北林惣吉著	淺野總一郎傳(十版)	價一・五〇
勝田貞次著	投資相談(十五版)	價一・五〇	報知新聞部編	中小産業の活路	價一・八〇
勝田貞次著	獨逸財界の機構(三版)	價一・八〇	勝田貞次著	不景氣時代の投資法(十版)	價一・五〇
小池四郎著	社會主義か資本主義か	價一・二〇	白柳秀湖著	食慾と愛慾(六版)	價一・六〇
大辻司郎著	漫談集	價一・〇〇	勝正憲著	營業收益税の話(八版)	價一・五〇
白柳秀湖著	社會展開の動力(三版)	價一・六〇	國松豐著	工場經營論(六版)	價一・五〇
上田貞次郎著	商工經營(七版)	價一・五〇	青野季吉著	實踐的文學論	價一・六〇
山田忍三著	百貨店經營と小賣業	價一・五〇	北野大吉著	實践的文學論	價一・五〇
後藤朝太郎著	哲人支那	價一・五〇	小汀利得著	街頭經濟學(十九版)	價一・五〇
新聞調查部編	ユーモア百話(六版)	價一・五〇	近松秋江著	文壇三十年	價一・八〇
小島精一著	アメリカ恐慌の見透し	價一・〇〇	北林惣吉著	女の心	價一・二〇

(4) 録目書圖房書倉千

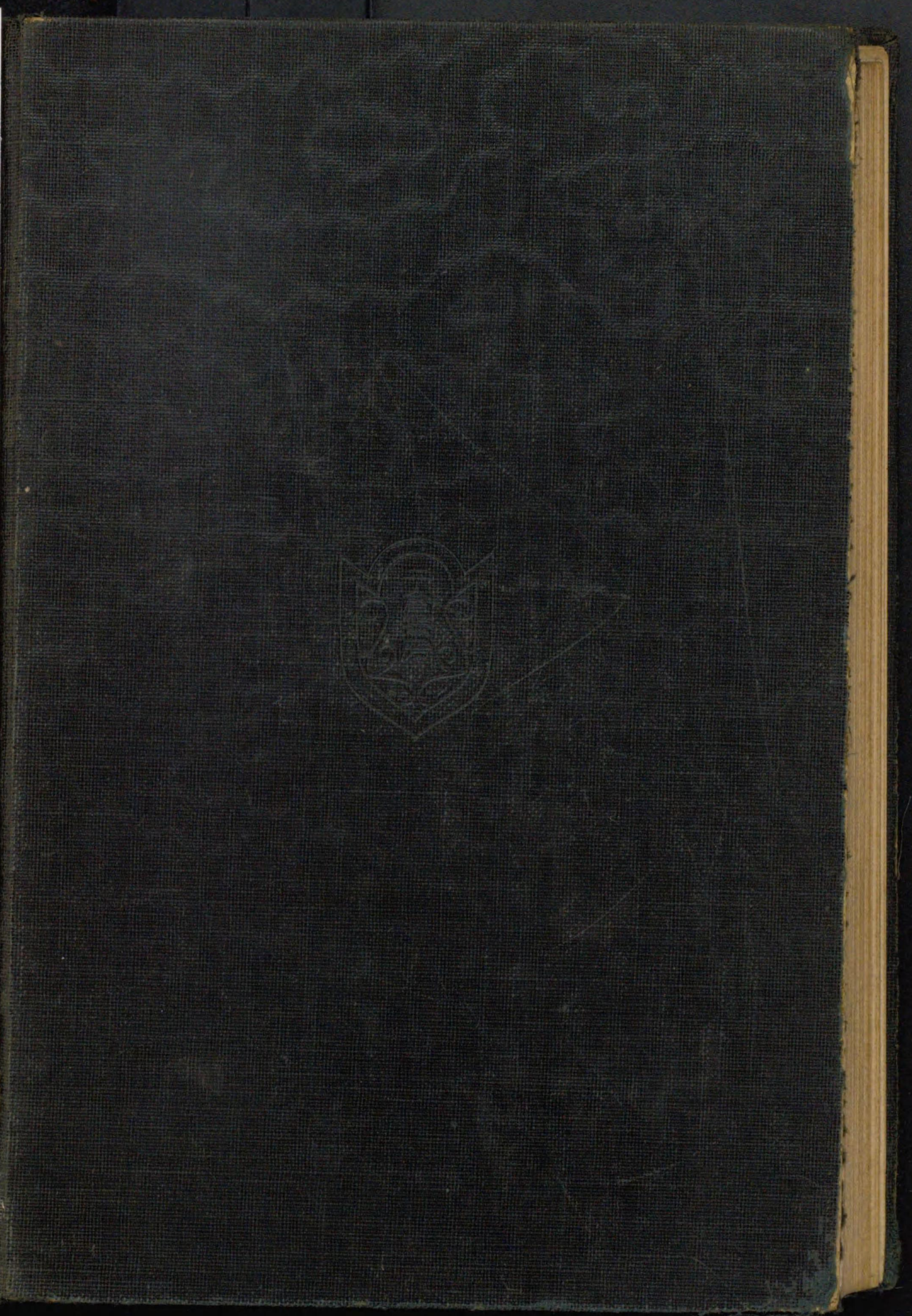
著者	書名	定價	著者	書名	定價
野守 廣著	信託經營論	價一・五〇 送料一・八〇	高橋亀吉著	景氣はドウなる (九版)	價一・五〇 送料一・八〇
木村 毅著	巴里情痴傳 (五版)	價一・五〇 送料一・八〇	勝田貞次著	景氣の見方 (三版)	價一・五〇 送料一・八〇
宮川貞一郎譯	金本位制度の理論と實際	價一・三〇 送料一・〇〇	福田敬太郎著	商業概論 (六版)	價一・五〇 送料一・八〇
佐々弘雄著	政治の貧困	價一・五〇 送料一・〇〇	太田哲三著	銀行簿記の常識 (五版)	價一・〇〇 送料一・〇〇
北林惣吉著	淺野翁物語 成功秘談	價一・五〇 送料一・〇〇	上野陽一著	販賣心理 (五版)	價一・五〇 送料一・〇〇
井關孝雄著	金融の常識 (七版)	價一・五〇 送料一・〇〇	都新聞峰島編	法律相談 (六版)	價一・五〇 送料一・〇〇
白柳秀湖著	住友物語 (十二版)	價一・五〇 送料一・〇〇	都新聞峰島編	衛生相談 (五版)	價一・五〇 送料一・〇〇
小林 新著	經營統計 (七版)	價一・五〇 送料一・〇〇	アインチヒ著	國際金融爭霸戰 (七版)	價一・〇〇 送料一・〇〇
山崎靖純著	何が財界を動かすか (九版)	價一・五〇 送料一・〇〇	山本米治譯	小資本開業案内 (六版)	價一・五〇 送料一・〇〇
北林惣吉著	投資基礎學 (四版)	價一・五〇 送料一・〇〇	報知新聞部編	取引所論 (五版)	價一・五〇 送料一・〇〇
内池廉吉著	倉庫論 (七版)	價一・五〇 送料一・〇〇	藤田國之助著	商業簿記の常識 (五版)	價一・〇〇 送料一・〇〇
清澤 洌著	不安世界の大通り (九版)	價一・五〇 送料一・〇〇	黒澤 清著	フリーザ景氣はドウなる (五十九版)	價一・三〇 送料一・〇〇
勝田貞次著	投資の仕方 (三版)	價一・五〇 送料一・〇〇	山崎靖純著	ロシア五ヶ年計畫 (廿五版)	價一・五〇 送料一・〇〇
木村 毅著	ラギーザお玉 (五版)	價一・八〇 送料一・〇〇	半野憲二著	明日を待つ彼	價一・五〇 送料一・〇〇
報知新聞部編	財界を牛耳る人々 (九版)	價一・五〇 送料一・〇〇	中外商業欄編	尖端的販賣戰術 (五版)	價一・五〇 送料一・〇〇

(5) 録目書圖房書倉千

著者	書名	定價	著者	書名	定價
中野正剛著	沈滞日本の更生 (四十五版)	價一・三〇 送料一・〇〇	村瀬 玄著	工業會計の常識	價一・〇〇 送料一・〇〇
井關十二郎著	販賣の常識	價一・〇〇 送料一・〇〇	藤本幸太郎著	商業統計の常識	價一・〇〇 送料一・〇〇
坂口武之助著	商品學	價一・五〇 送料一・〇〇	内池廉吉著	商業學の常識	價一・〇〇 送料一・〇〇
小林行昌著	商業算術の常識 (五版)	價一・〇〇 送料一・〇〇	小松 綠著	維新革命秘話	價二・〇〇 送料一・〇〇
山川 均著	無産政黨の話 (三版)	價一・五〇 送料一・〇〇	ベンネット著	人生如何に生くべきか	價一・〇〇 送料一・〇〇
加藤三郎譯	世界商業秘話	價一・六〇 送料一・〇〇	森田 敏譯	列強經濟のデレンマ	價一・〇〇 送料一・〇〇
アインチヒ著	世界經濟恐慌の解剖	價一・二〇 送料一・〇〇	バツターソン著	會計學の常識	價一・二〇 送料一・〇〇
木村禧八郎譯	金融統制論	價一・五〇 送料一・〇〇	伊地知軍司譯		
高島佐一郎著	日本富豪發生學 (下士階級革命の巻)	價一・六〇 送料一・〇〇	吉田良三著		
白柳秀湖著	アメリカの世界經濟征服	價一・五〇 送料一・〇〇			
デニール著	世界經濟征伐	價一・五〇 送料一・〇〇			
香月 保譯	學識としての商法改正の話	價一・五〇 送料一・〇〇			
松本丞治著	世界の動きと日本の立場 (三十版)	價一・三〇 送料一・〇〇			
本多熊太郎著	金本位制の危機 (三十五版)	價一・三〇 送料一・〇〇			
木村禧八郎著	事務管理總論	價一・五〇 送料一・〇〇			
金子利八郎著	商品學の常識	價一・〇〇 送料一・〇〇			
佐藤 弘著					



606
347

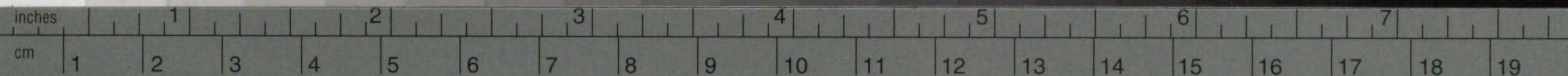


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

